



Title	清華簡『楚居』初探
Author(s)	浅野, 裕一
Citation	中国研究集刊. 2011, 53, p. 260-290
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

清華簡『楚居』初探

浅野裕一

一

『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』（中西書局・二〇一〇年十二月）には、『楚居』と命名された文献が収録されている。『楚居』は全体が十六簡から成るが、その中の四簡の下端に三字分から四字分の残欠部分が存在する。簡長は四十七・五センチメートル前後で、両端は平齊、編線は三道、一簡当たりの文字数は三十七字から四十八字の間である。竹簡上の文字は、典型的な楚文字と考えられる。

『楚居』は、二十三代にわたる楚の歴代君主がどこに居たのか、その居所や国都を記録した文献で、もともとの篇題はないが、その内容が『世本』の「居篇」に類似するところから『楚居』と命名された。『楚居』は郢と呼ばれる国都が十四もあつたと記すとともに、「楚人」なる呼称や「郢」なる国都名の由来を説明するが、これは楚

人自身が自らの履歴を語った資料として重要な意義を持つ。そこで小論では、『楚居』と『史記』楚世家を比較しながら、『楚居』の発見がもたらす新たな知見をいくつか選んで、簡単な紹介を試みることにしたい。

最初に『楚居』の釈文と書き下しと現代語訳を示す。釈文は基本的には『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』に従ったが、「清華簡『楚居』研讀札記」（復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生讀書会・二〇一一年一月五日）や、「網摘・『清華一』專輯」（任攀・程少軒整理、二〇一一年二月二日）、及び私見により改めた箇所がある。

《釈文》

季繹（連）初降於郢（馳）山、氏（抵）于空（穴）竊（竊）。
述（注）（趨）出于喬（驕）山、羣（宅）尻（處）爰波（陂）。

逆上川水、見盤庚之子、尻(處)于方山。女曰比(妣)佳、秉茲(慈)銜(注2)、率(善)【(1)相、晉(注3)】(歷)曹(遊)四方。季纘(連)韻(聞)元(其)又(有)鳴(聘)、從及之盤(泮)、爰生緹白(伯)、遠中(仲)。媯(注4)【毓·游】裳(徇)羊(祥)、先尻(處)于京宗(注5)。穴禽(注6)。遲(遲)遷(徙)於京宗、爰曼(得)【(2)妣威(注7)】(列)、逆流哉(載)水、畢(厥)頊(狀)翌(聶)耳。乃妻之、生倗吾(叔)、麗季。麗不從行、渭(潰)自醜(注8)【脅·胸】出、妣威(列)賓于天、晉(巫)弋(咸)賅(該)元(其)醜(脅·胸)以楚、氏(抵)【(3)今日楚人。至禽懼(狂)亦居京宗。至禽舜(繹)與屈約(紉)、思(使)若(郟)蕀(唵)卜遷(徙)於臺(夷)屯(屯)、爲枝(榘—便)室【(室、室)既成、無以內之、乃糶(竊)若(郟)人之輔(榘)以】(4)祭。思(懼)元(其)室(主)、夜而內尿、氏(抵)今日窆【(窆、窆)杗(必)夜。至禽只、禽祖、禽鼓(焚)及禽鵬(錫)、禽迨(渠)、聶(盡)居臺(夷)屯(屯)。禽迨(渠)遷(徙)居發漸。至禽胡(艾)、禽【(5)雙(塾)居發漸。禽雙(塾)遷(徙)居旁軒。至禽緇(延)自旁軒遷(徙)居喬多。至禽甬(勇)及禽嚴、禽相(霜)及禽霏(雪)及禽訓(徇)、禽駮及若聶(敖)禽義(儀)、皆居喬多。若聶(敖)禽【(6)義(儀)遷(徙)居箬(郟)。至焚(蚡)冒禽隲(師)

自箬(郟)遷(徙)居焚。至宵聶(敖)禽鹿自焚遷(徙)居宵。至武王禽駮(通)自宵遷(徙)居兔、女(焉)訶(始)□□□□□(7)福。衆不容於兔、乃渭(潰)疆涅之波(陂)而宇人、女(注9)【(焉)氏(抵)今日郢。至文王自疆涅(郢)遷(徙)居淋(注10)】(和郢、和郢)遷(徙)居焚【(焚)郢】(焚郢、樊郢)遷(徙)居爲【(爲郢、爲郢)復】(8)遷(徙)居兔郢、女(焉)改名之曰福丘。至臯(莊)蠶(敖)自福丘遷(徙)至成王自樊(睽)郢遷(徙)表(襲)爲郢。至臧(莊)淋【(和郢、和郢)遷(徙)□□□□】(9)居嬰(睽)郢。至穆王自嬰(睽)郢遷(徙)表(襲)爲郢。至臧(莊)王遷(徙)表(襲)焚【(焚)郢、樊郢】遷(徙)居同宮之北。若聶(敖)迨(起)禍、女(焉)遷(徙)居承【(蒸)之野】(蒸之野、蒸之野)□□□□(10)表(襲)爲郢。至鞞(共)王、康王、瓘【(嗣子)王皆居爲郢。至靈(靈)王自爲郢遷(徙)居秦(乾)溪之上、以爲尻(處)於章【華之臺】】(11)競(景)坪(平)王卽立(位)、猷(猶)居秦(乾)溪之上。至邵(昭)王自秦(乾)溪之上遷(徙)居媯(注11)【(媯)郢】(美郢、美郢)遷(徙)居鵲【(鵲)郢、鵲郢】遷(徙)表(襲)爲郢。盍(闔)虜(廬)內(入)郢、女(焉)復(復)【(12)遷(徙)居秦【(乾)溪】之【(乾)溪之上、

乾溪之上) 逡(復) 逡(徒) 婁(襲) 媯(媯・美) 郢。
 至獻惠王自媯(媯・美) 郢逡(徒) 婁(襲) 爲郢。白公
 起(起) 禍、女(焉) 逡(徒) 婁(襲) 淋(和) 郢、改
 爲之、女(焉) 曰肥】(13) 遺、以爲尻(處) 於囿(注12) 瀉
 瀉(徒) 居郢吁。王大(太) 子以邦逡(復) 於淋(和)
 郢、王自郢吁逡(徒) 郢(蔡)、王大(太) 子自淋(和)
 郢】(14) 逡(徒) 居疆郢。王自郢(蔡) 逡(復) 郢(鄢)。
 東大王自疆郢逡(徒) 居藍(徒) 郢(藍郢、藍郢) 逡(徒)
 居郢(郢) 郢(郢郢、郢郢) 逡(復) 於郢(郢)、王大(太)
 子以邦居郢(郢) 郢、以爲尻(處) 於(15) 斂郢。至恕
 (悼) 折(哲) 王猷(猶) 居郢(郢) 郢。申(中) 詰(謝)
 (注13) 起(起) 禍、女(焉) 逡(徒) 婁(襲) 肥遺。邦大
 瘠(瘠) (注14) 女(焉) 逡(徒) 居郢郢。】(16)

《書き下し》

季連は初めて驍山に降り、穴窮するに抵る。趨みて驍山
 に出で、爰陂に宅処す。洌水を逆上り、盤庚の子に見ゆ
 るに、方山に処る。女を妣佳と曰い、慈を乗りて善く相
 け、四方に歴遊す。季連は其の聘有るを聞き、従いて之泮
 に及び、爰に緄伯・遠仲を生む。遊ぶこと徜徉にして、

先に京宗に処る。穴熊は遅れて京宗に徙り、爰に妣列を
 得て、載水を逆流るに、厥の状は撰するのみ。乃ち之を妻
 り、佗叔・麗季を生む。麗は従い行かずして、潰りて脅
 (胸) より出づ。妣列は天に賓せられんとし、巫咸は其
 の脅(胸) を該むに楚を以てすれば、今に抵るも楚人と
 曰う。熊狂に至りて亦た京宗に居る。熊繹と屈紃に至り
 て都喻をしてトせしめて夷屯に徙り、便室を爲るに、室
 既に成るも、以て之内るもの無ければ、乃ち郢都人の種
 を窃みて以て祭る。其の主を懼れ、夜に内りて原らば、
 今に抵るも棄と曰い、棄は必ず夜にす。熊只・熊袒・熊樊
 及び熊錫(楊)・熊渠に至るまでは、尽く夷屯に居る。熊
 渠は徙りて発漸に居る。熊艾・熊摯に至るまで発漸に居
 る。熊摯は徙りて旁岍に居る。熊延に至りて旁岍より徙
 りて喬多に居る。熊勇と熊巖 熊霜と熊雪と熊徇、熊罟
 と若敖・熊儀に至るまでは、皆喬多に居る。若敖・熊儀
 は徙りて郢に居る。蚡冒・熊師は郢より徙りて樊に居る。
 宵(霄) 敖・熊鹿に至りて樊より徙りて宵に居る。武王
 熊鯨(通) に至りて宵より徙りて免に居り、焉ち始めて
 □□□□福。衆は免に容らざれば、乃ち疆涅の陂を潰
 りて人を宇わさば、焉ち今に抵るも郢と曰う。文王に至
 りて疆郢より徙りて淋(和) 郢に居り、淋(和) 郢より
 徙りて樊郢に居り、樊郢より徙りて為郢に居り、為郢よ

り復た徙りて免郢に居り、焉ち之を改名して福丘と曰う。莊(杜)敖に至りて福丘より徙りて郟郢に襲る。成王に至りて郟郢より徙りて淋(和)郢に襲り、淋(和)郢より徙りて□□□□睽郢に居る。穆王に至りて睽郢より徙りて為郢に襲る。莊王に至りて徙りて樊郢に襲り、樊郢より徙りて同官の北に居る。若敖は禍を起さば、焉ち徙りて蒸の野に居る。蒸の野□□□、□為郢に襲る。共王・康王・嗣子の王に至るまでは、皆為郢に居る。靈王に至りて為郢より徙りて乾溪の上に居り、以て章華の台に処ると為す。景平王即位するも、猶お乾溪の上に居る。昭王に至りて乾溪の上より徙りて嫩(美)郢に居り、嫩(美)郢より徙りて鶡郢に居り、鶡郢より徙りて為郢に襲る。鬲廬郢に入らば、焉ち復た徙りて乾溪の上に居る。乾溪の上より復た徙りて嫩(美)郢に襲る。猷惠王に至りて嫩(美)郢より徙りて為郢に襲る。白公は禍を起さば、焉ち徙りて淋(和)郢に襲り、改めて之を為りて、焉ち肥遺と曰い、以て鹵(酈)瀉に処ると為し、鹵(酈)瀉より徙りて鄢郢に居り、鄢郢より徙りて郢吁に居る。王太子は邦を以て淋(和)郢に復し、王は郢吁より蔡に徙り、王太子は淋(和)郢より徙りて疆郢に居る。王は蔡より鄢に復る。東大王は疆郢より徙りて藍郢に居り、藍郢より徙りて鄢郢に居り、鄢郢より鄢に復る。王太子

は邦を以て鄢郢に居り、以て鐵郢に居ると為す。悼哲王に至るも猶お鄢に居る。中謝は禍を起さば、焉ち徙りて肥遺に襲る。邦は大いに瘠せて、焉ち徙りて鄢郢に居る。

《現代語訳》

季連は初めて騶山に降り立ち、(家屋がないため、やむを得ず)洞穴を住まいとして窮屈な生活を送った。季連は騶山から勇躍前進して驕山(殺山)に出て、爰陂に住居を構えた。さらに洌水(伊水)を遡って、そこで殷王・盤庚の息子に出会った。盤庚の息子は方山(外方山)に住んでおり、その娘の名を妣佳と叫んだ。妣佳は慈愛で応接する姿勢で善く盤庚の息子の外交を輔佐し、外交使節として四方を歴遊していた。季連は(爰陂を訪れた妣佳から)盤庚の息子が自分を聘問していると聞いて、妣佳に従って之泮に赴き、(妣佳を妻に迎えて)綰伯と遠仲の兄弟を生んだ。あちこちをゆつくり経巡りながら、先に京宗の地に入った。穴熊は遅れて京宗の地に移り住み、そこで妣列に出会って、載水(淅川)を遡り、その様子はいつも寄り添う仲むつまじさであった。そこで妣列を妻に迎え、佶叔と麗季の兄弟を生んだ。麗季は母親に従順

ではなく、身体を破り裂いて母親の胸から抜け出した。そこで妣列はあやうく死にかけ、巫咸は楚で母親の胸を包合したので、今に至るも楚人というのである。熊狂の代になつてまた京宗に住居を定めた。熊繹と屈紃に至つて、都啗に占わせて夷屯に移住し、祭祀を行う便室を作つたが、便室がすでに出来上がつても、その中に収める祭神がなかつたので、都人が祭神にしていた無角の牛を盗んできて邪惡の侵入を防ぐ祭神とした。もともとどの持ち主である都人に発覚するのを恐れて、夜になつてからこっそり祭祀したので、今に至るまで蔡（ひそか）と稱し、蔡の儀式は必ず夜間に執り行うのである。熊只・熊舳・熊焚及び熊錫（楊）・熊渠に至るまでは、すべて夷屯に都を置いた。熊渠は夷屯から発漸に都を遷した。熊艾・熊摯に至るまでは発漸に居住した。熊摯は旁軒に都を遷した。熊延になつて旁軒から番多に都を遷した。熊勇と熊蔽、熊霜と熊雪と熊徇、熊罟と若敖・熊儀に至るまでは、皆番多に居住した。若敖・熊儀は都に都を遷した。蚡冒・熊師は都からさらに蔡に都を遷した。宵（霄）敖・熊鹿に至つて蔡から宵に都を遷した。武王熊通に至つて宵から免に都を遷し、そこで始めて□□□□□福。大勢の人々を免に收容できなかつたので、そこで疆涅を囲んでいた堤防を切り、市街地を拡大して人々をそこに居住

させたので、それ以来今に至るまで楚の都を郢と呼ぶのである。文王に至つて疆郢から淋（和）郢に都を遷し、淋（和）郢から樊郢に都を遷し、樊郢からさらに為郢に都を遷し、為郢からさらに免郢に都を遷し、免郢を改名して福丘と称した。莊（杜）敖に至つて福丘から移動して都郢に都を置いた。成王に至つて都郢から移動して淋（和）郢に都を置き、淋（和）郢から移動して□□□□睥郢に都を置いた。穆王に至つて睥郢から移動して為郢に都を置いた。莊王に至つて移動して樊郢に都を置き、樊郢からさらに移動して同宮の北に都を置いた。若敖が反乱を起こしたので、都を蒸の野に移した。蒸の野□□□□、□為郢に都を置いた。共王・康王・嗣子の王に至るまでは、皆為郢に都を置いた。靈王に至つて為郢から移動して乾溪の上に都を置き、そこを章華の台と称した。景平王が即位したが、依然として乾溪の上に居た。昭王に至つて乾溪の上から移動して嫩（美）郢に都を置き、嫩（美）郢から移動して鶉郢を都とし、鶉郢からさらに移動して為郢に都を遷した。闔廬が派遣した吳軍が郢に入城してきたので、また乾溪の上に都を遷した。乾溪の上からまた移動して嫩（美）郢に都を遷した。献惠王に至つて嫩（美）郢から移動して為郢に都を遷した。白公が反乱を起こしたので、移動して淋（和）郢に都を遷し、改めて

造営し直して、肥遺と命名し、酈(酈) 溝に処ると称し、酈(酈) 溝から移動して鄆郢に都を遷し、鄆郢からさらに移動して郢吁に都を遷した。王の太子は政府の行政組織を引き連れて淋(和) 郢に戻り、王は郢吁から蔡に移動し、王太子は淋(和) 郢から移動して疆郢に都を遷した。王は蔡から鄆(えん) 郢に戻った。東大王は疆郢から移動して藍郢に都を遷し、藍郢から移動して酈郢に都を遷し、酈郢から鄆(えん) 郢に戻った。王の太子は政府の行政組織を引き連れて酈郢に都を遷し、酈郢に居住していると称した。悼哲王の代になっても依然として酈郢を都としていた。中謝が反乱を起こしたので、酈郢から移動して肥遺に都を置いた。国家は大いに疲弊したので、肥遺から移動して鄆郢に都を置いた。

二

司馬遷は『史記』楚世家に楚国の歴史を記録する。その記述を以下『楚居』と比較して、両者の間の異同を抽出してみよう。『史記』楚世家は楚の起源を次のように説き起こす。

楚之先祖、出自帝顓頊高陽。高陽者、黃帝之孫、昌

意之子也。高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功能光融天下。帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後。復居火正爲祝融。吳回生陸終。陸終生子六人。圻剖而產焉。其長一曰昆吾、二曰參胡、三曰彭祖、四曰會人、五曰曹姓、六曰季連。半姓。楚其後也。昆吾氏夏之時嘗爲侯伯。桀之時湯滅之。彭祖氏殷之時嘗爲侯伯。殷之末世滅彭祖氏。季連生附沮、附沮生穴熊。其後中微、或在中國、或在蠻夷、弗能紀其世。

楚の先祖は、帝顓頊高陽より出づ。高陽なる者は、黃帝の孫にして、昌意の子なり。高陽は稱を生み、稱は卷章を生み、卷章は重黎を生む。重黎は帝嚳高辛の為に火正に居り、甚だ功有りて能く天下に光融す。帝嚳は命けて祝融と曰う。共工氏の乱を作すや、帝嚳は重黎をして之を誅せしむるも尽くさず。帝は乃ち庚寅の日を以て重黎を誅して、其の弟の吾回を以て重黎の後と爲す。復た火正に居りて祝融と爲る。吾回は陸終を生む。陸終は子六人を生む。圻剖して焉を産む。其の長ずるや一を昆吾と曰い、二を參胡と曰い、三を彭祖と曰い、四を會人と曰い、五を曹

姓と曰い、六を季連と曰う。半姓なり。楚は其の後なり。昆吾氏は夏の時に嘗て侯伯と爲る。桀の時湯は之を滅ぼす。彭祖氏は殷の時に嘗て侯伯と爲る。殷の末世に彭祖氏を滅ぼす。季連は附沮を生み、附沮は穴熊を生む。其の後は中ごろ微にして、或いは中国に在り、或いは蛮夷に在りて、其の世を紀す能わず。

これによれば楚の世系は、黄帝—昌意—顓頊高陽—称—卷章—重黎（兄）—吳回（弟）—陸終—①昆吾②參胡③彭祖④會人⑤曹姓⑥季連—季連（半姓）—附沮—穴熊…途中衰微して世系不明…と記される。

これに対して『楚居』の側には黄帝から陸終までの系譜は見られず、陸終の第六子である季連から話が始まる。

季繚（連）初降於郢（驪）山、氏（抵）于空（穴）窳（窮）。遯（趨）出于喬（驕）山、寯（宅）尻（處）爰波（陂）。逆上泅水、見盤庚之子、尻（處）于方山。女曰比（妣）隹、秉茲（慈）銜（率・善）一（一）相、晉（歷）曹（遊）四方。季繚（連）輯（聞）汧（其）又（有）鳴（聘）、從及之盤（泮）、爰生緹白（伯）、遠中（仲）。媼（毓・游）豈（徇）羊（祥）、先尻（處）

于京宗。穴禽遷（遷）遷（徙）於京宗、爰曼（得）一（二）妣臧（列）、逆流哉（載）水、卒（厥）廂（狀）豸（蕭）耳。

季連は初めて驪山に降り、穴窳するに抵る。趨みて驕山に出で、爰波に宅処す。泅水を逆上り、盤庚の子に見ゆるに、方山に処る。女を妣隹と曰い、慈を乗りて善く相け、四方に歴遊す。季連は其の聘有るを聞き、従いて之泮に及び、爰に緹伯・遠仲を生む。遊ぶこと徇徻にして、先に京宗に処る。穴熊は遅れて京宗に徻り、爰に妣列を得て、載水を逆流るに、厥の状は撰するのみ。

楚世家は陸終の第六子である季連が楚の始祖だと記すが、『楚居』では出自に関する何の説明もないままに、いきなり季連が登場する。しかも「驪山に降る」と言いながら、どこから降ってきたのかは明らかにされない。

また『楚居』によれば、驪山から驕山に進出し、爰波に居住した季連は、さらに泅水を遡って方山に居た盤庚の息子に出会い、その招聘に応じて之泮に赴いたという。そうであれば季連は、殷に都を遷して国号を殷と称した殷王・盤庚に間接的に臣下として仕えたことになる。ま

た『楚居』は、季連は盤庚の子の娘・妣佳ひけいを妻に迎え、
皐伯と遠仲の兄弟を生んだとも言ふ。とすれば、楚の始
祖たる季連は殷王と姻戚關係にあり、季連の息子たちは
殷王の血筋を受け継いだことになる。これは楚と殷の深
い繋がりを表明するもので、楚世家には全く見えない記
事である。

『楚居』は皐伯と遠仲の兄弟を生んだ季連が先に京宗
の地に入り、穴熊は遅れて京宗の地に移ってきたと記す。
ことさらに京宗の地に入った先後關係を強調する点から判
断するに、季連と穴熊は全く同時代の人物と理解されて
いるようであるが、『楚居』の記述だけでは穴熊が何者な
のか、その出自は皆目不明である。しかも楚世家では、
穴熊は季連の孫とされている。また楚世家では季連の息
子は附沮とされるのに対し、『楚居』では皐伯と遠仲とさ
れている。このように楚世家と『楚居』では、季連から
穴熊に至る間の系譜に大きな食い違いが存在している。
あるいは穴熊が楚の原氏族の族長で、そこに季連が中原
から流亡してきた貴種として迎えられたのかも知れない。
楚世家は穴熊以後の楚の世系は不明だとし、季連の末
裔である鬻熊から世系の記述を再開する。

周文王之時、季連之苗裔曰鬻熊。鬻熊子事文王。蚤

卒。其子曰熊麗。熊麗生熊狂。熊狂生熊繹。熊繹當
周成王之時。舉文武勤勞之後嗣、而封熊繹於楚蠻、
封以子男之田。姓芈氏。居丹陽。楚子熊繹、與魯公
伯禽・衛康叔子牟・晉侯燮・齊太公子呂伋俱事成王。
熊繹生熊艾。熊艾生熊黶。熊黶生熊勝。熊勝以弟熊
楊爲後。熊楊生熊渠。熊渠生子三人。當周夷王之時、
王室微、諸侯或不朝相伐。熊渠甚得江漢間民和。乃
興兵伐庸楊粵、至于鄂。熊渠曰、我蠻夷也。不與中
國之號諡。乃立其長子康爲句亶王、中子紅爲鄂王、
少子執疵爲越章王。皆在江上楚蠻之地。及周厲王之
時暴虐。熊渠畏其伐楚、亦去其王。後爲熊母康。母
康蚤死。熊渠卒、子熊摯紅立。摯紅卒、其弟弒而代
立。曰熊延。

周の文王の時、季連の苗裔を鬻熊と曰う。鬻熊の子
は文王に事う。蚤く卒す。其の子を熊麗と曰う。熊
麗は熊狂を生む。熊狂は熊繹ゆうまを生む。熊繹は周の成
王の時に当たる。文武の勤勞の後嗣を挙げ、而して
熊繹を楚蛮に封じ、封ずるに子男の田を以てす。姓
は芈氏。丹陽に居る。楚子熊繹は、魯公伯禽、衛康
叔の子・牟、晉侯燮、齊太公の子・呂伋と俱に成王
に事う。熊繹は熊艾ゆうかいを生む。熊艾は熊黶ゆうまを生む。熊

黽は熊勝を生む。熊勝は弟熊楊を以て後と為す。熊楊は熊渠を生む。熊渠は子三人を生む。周の夷王の時に当たり、王室は微にして、諸侯或いは朝せずして相伐つ。熊渠は甚だ江漢の間の民の和を得る。乃ち兵を興して庸と楊粵を伐ち、鄂に至る。熊渠曰く、我は蛮夷なり。中国の号諡に与らずと。乃ち其の長子康を立てて句亶王と為し、中子紅を鄂王と為し、少子執疵を越章王と為す。皆江上の楚蛮の地に在り。周の厲王の時に及びて暴虐なり。熊渠は其の楚を伐たんことを畏れ、亦た其の王を去る。後を熊母康と為す。母康は蚤く死す。熊渠卒し、子の熊摯紅立つ。摯紅卒するに、其の弟弒して代わりて立つ。熊延と曰う。

楚世家によれば、鬻熊以後の楚の世系は次のようである。鬻熊―熊麗―熊狂―熊繹―熊艾―熊黶―熊勝（兄）―熊楊（弟）―熊渠―①長子熊康（句亶王）、熊母康（後に王号を去る）②中子熊紅（鄂王）③少子熊執疵（越章王）―熊摯紅―熊延。これに対して、『楚居』は楚の世系を次のように記録する。

穴禽遲（遲）逯（徙）於京宗、爰曼（得）【（2）妣

威（列）、逆流哉（載）水、昏（厥）瘡（狀）豎（聳）耳、乃妻之、生亶晉（叔）、麗季。麗不從行、渭（潰）自體（脅）出、妣威（列）賓于天、晉（巫）戔（威）賅（該）元（其）體（脅）以楚、氏（抵）【（3）今日楚人。至禽隍（狂）亦居京宗。至禽舜（繹）與屈約（紉）、思（使）若（都）赫（噓）卜逯（徙）於臺（夷）屯（屯）、爲枝（榷―便）室【（室、室）既成、無以內之、乃櫛（竊）若（都）人之桶（撞）以】（4）祭。思（懼）元（其）室（主）、夜而內尿、氏（抵）今日蔡【（蔡、蔡）札（必）夜。至禽只、禽舳、禽蕪（焚）及禽駟（錫）、禽迨（渠）、聿（盡）居臺（夷）屯（屯）。禽迨（渠）逯（徙）居發漸。至禽朔（艾）、禽【（5）雙（摯）居發漸。禽雙（摯）逯（徙）居勞軒。至禽緝（延）自勞軒逯（徙）居喬多。

穴熊は遅れて京宗に徙り、爰に妣列を得、載水を逆流するに、厥の状は撰するのみ。乃ち之を妻り、亶叔・麗季を生む。麗は従い行かずして、潰りて脅（胸）より出づ。妣列は天に賓せられんとし、巫威は其の脅（胸）を該むに楚を以てすれば、今に抵るも楚人と曰う。熊狂に至りて亦た京宗に居る。熊繹と屈紉に至りて部噓をして卜せしめて夷屯に徙り、便室を爲るに、

室既に成るも、以て之に内るるもの無ければ、乃ち郡人の鐘を窃みて以て祭る。其の主を懼れ、夜に内りて戻らば、今に抵るも棄と曰い、棄は必ず夜にす。熊只・熊舳・熊樊及び熊錫(楊)・熊渠に至るまでは、尽く夷屯に居る。熊渠は徙りて発漸に居る。熊艾・熊摯に至るまで発漸に居る。熊摯は徙りて旁岬に居る。熊延に至りて旁岬より徙りて喬多に居る。

『楚居』によれば始祖・季連から熊延に至る世系は、季連―穴熊―偃叔・麗季―熊狂―熊繹・屈紉―熊只―熊舳―熊樊―熊錫―熊渠―熊艾―熊摯―熊延となる。楚世家に登場する鬻熊は『楚居』には全く姿を見せない。あるいは『楚居』の偃叔が鬻熊に相当するのも知れないが、楚世家では鬻熊と熊麗が親子であるのに対して、『楚居』では偃叔と麗季は兄弟とされているから、はつきりとはしない。また楚世家では熊艾は熊繹と熊黹の間に位置するが、『楚居』では熊渠と熊摯の間に位置していて、両者の間に食い違いが存在する。楚世家では熊繹は丹陽に居たとされ、『楚居』は夷屯(河南省浙川)に居たと言うから、丹陽は丹江北岸の河南・浙川を指す可能性が高い(注15)。

楚世家は楚と周の関係をかなり詳しく述べ、熊麗は周

の文王に仕え、周の成王に仕えた熊繹は成王から子爵・男爵相当の規模で楚蛮の地に封建されたと記す。これによれば、楚は前一〇五〇年ごろに起きた殷周革命の前からすでに周の文王に仕え、成王の代に周から正式に諸侯として封建されたことになる。だが『楚居』の側は、周との密接な関係については一切触れない。また楚世家は、熊渠が「我は蛮夷なり。中国の号諡に与らず」と宣言して、三人の息子に王号を名乗させたものの、周の厲王の討伐を恐れて後に王号を撤回したと記すが、『楚居』の側には称王をめぐる周との緊張関係についても記述がない。

さらに『楚居』は穴熊の子が熊麗だとして二人を直接に繋げるが、楚世家では「季連は附沮を生み、附沮は穴熊を生む。其の後は中ごろ微にして、或いは中国に在り、或いは蛮夷に在りて、其の世を紀す能わず」と、穴熊以後の楚の世系は不明だとして記さず、鬻熊から記述を再開した上で、熊麗を鬻熊の子とする。『楚居』によれば、穴熊は始祖の季連と同じく、前一四〇〇年ごろ殷に都を遷した第十九代の殷王・盤庚と同時代の人物となる。その穴熊の子の熊麗が、楚世家が言うように周の文王の時代、すなわち第三十代の殷王・帝辛(紂)と同時代の人物だとすれば、父と子の間で三百年前後の間隔が生じてしまう(注16)。したがってこの食い違いに関しては、穴熊

以後の世系は不明だとする楚世家の方が妥当性を備えているであろう。『楚居』の側が、殷王・盤庚から周の文王に至る長期に渡り、楚の世系が不明であるとの空白期間を隠蔽するため、穴熊と熊麗を父子関係で直結させた疑いが残る。

楚世家は熊延以降の楚の世系を次のように記録する。

熊延生熊勇。熊勇六年而周人作亂、攻厲王。厲王出奔虜。熊勇十年卒、弟熊嚴爲後。熊嚴十年卒。有子四人。長子伯霜、中子仲雪、次子叔堪、少子季洵。熊嚴卒、長子伯霜代立。是爲熊霜。熊霜元年、周宣王初立。熊霜六年卒。三弟爭立。仲雪死、叔堪亡避難於濮。而少弟季洵立。是爲熊洵。熊洵十六年、鄭桓公初封於鄭。二十二年熊洵卒、子熊罈立。熊罈九年卒、子熊儀立。是爲若敖。若敖二十年、周幽王爲犬戎所弑。周東徙。而秦襄公始列爲諸侯。二十七年、若敖卒、子熊坎立。是爲霄敖。霄敖六年卒、子熊駒立。是爲蚡冒。蚡冒十三年、晉始亂。以曲沃之故。蚡冒十七年卒。蚡冒弟熊通、弑蚡冒子而代立。是爲楚武王。(中略)三十五年、楚伐隨。隨曰、我無罪。楚曰、我蠻夷也。今諸侯皆爲叛、相侵或相殺。我有敵甲。欲以觀中國之政。請王室尊吾號。隨人爲之周、

請尊楚。王室不聽。還報楚。三十七年、楚熊通怒曰、吾先鬻熊文王之師也。蚤終。成王舉我先公、乃以子男田令居楚。蠻夷皆率服。而王不加位。我自尊耳。乃自立爲武王、與隨人盟而去。於是始開濮地而有之。五十一年、周召隨侯數以立楚爲王。楚怒、以隨背己伐隨。武王卒師中而兵罷。

熊延は熊勇を生む。熊勇六年にして周人乱を作し、厲王を攻む。厲王は虜に出奔す。熊勇は十年にして卒し、弟熊嚴を後と爲す。熊嚴は十年にして卒す。子四人有り。長子は伯霜、中子は仲雪、次子は叔堪、少子は季洵なり。熊嚴卒し、長子伯霜代りて立つ。是を熊霜と爲す。熊霜元年、周の宣王初めて立つ。熊霜は六年にして卒す。三弟立つを争う。仲雪は死し、叔堪は亡げて難を濮に避く。而して少弟季洵立つ。是を熊洵と爲す。熊洵十六年、鄭の桓公は初めて鄭に封ぜらる。二十二年にして熊洵卒し、子の熊罈立つ。熊罈は九年にして卒し、子の熊儀立つ。是を若敖と爲す。若敖二十年、周の幽王は犬戎の弑する所と爲る。周は東に徙る。而して秦の襄公は始めて列して諸侯と爲る。二十七年、若敖は卒し、子の熊坎立つ。是を霄敖と爲す。霄敖は六年にして卒し、子

の熊胸立つ。是を蚡冒と為す。蚡冒十三年、晋始めて乱る。曲沃の故を以てなり。蚡冒は十七年にして卒す。蚡冒の弟熊通は、蚡冒の子を弑して代りて立つ。是を楚の武王と為す。(中略) 三十五年、楚は隨を伐つ。隨曰く、我は罪無しと。楚曰く、我は蛮夷なり。今諸侯は皆叛くを為し、相侵し或いは相殺す。我は徹甲有り。以て中国の政を觀んと欲す。王室に請いて吾が号を尊くせよと。隨人は為に周に之き、楚を尊くせんことを請う。王室は聽かず。還りて楚に報ず。三十七年、楚の熊通怒りて曰く、吾が先の鬻熊は文王の師なり。蚤く終わる。成王は我が先公を挙げ、乃ち子男の田を以て楚に居ら令む。蛮夷は皆率い服せり。而るに王は位を加えず。我は自ら尊くせんのみと。乃ち自立して武王と為り、隨人と盟いて去る。是に於いて始めて濮の地を開きて之を有つ。五十一年、周は隨侯を召して數むるに楚を立てて王と為すを以てす。楚は怒り、隨の己に背くを以て隨を伐つ。武王は師中に卒して兵罷む。

これによれば熊延から後の楚の世系は、熊勇(兄)―熊巖(弟)―①長子伯霜②中子仲雪③次子叔堪④少子季徇―熊霜―熊徇―熊罾―熊儀(若敖)―熊坎(霄敖)―熊

胸(蚡冒)―熊通(武王)となる。一方の『楚居』は、熊勇から武王に至る世系を次のように記す。

至禽甬(勇) 及禽巖、禽相(霜) 及禽霏(雪) 及禽訓(徇)、禽罾及若罾(敖) 禽義(儀)、皆居喬多。若罾(敖) 禽(6) 義(儀) 逯(徙) 居筭(都)。至焚(蚡) 冒禽隲(師) 自筭(都) 逯(徙) 居焚。至宵罾(敖) 禽鹿自焚逯(徙) 居宵。至武王禽駘(通) 自宵逯(徙) 居免、女(焉) 訶(始) □□□□□□ (7) 福。衆不容於免、乃渭(潰) 疆涅之波(陂) 而宇人、女(焉) 氏(抵) 今日郢。

熊勇と熊巖、熊霜と熊雪と熊徇、熊罾と若敖・熊儀に至るまでは、皆喬多に居る。若敖・熊儀は徙りて都に居る。蚡冒・熊師は都より徙りて焚に居る。宵(霄) 敖・熊鹿に至りて焚より徙りて宵に居る。武王熊駘(通) に至りて宵より徙りて免に居り、焉ち始めて□□□□□福。衆は免に容らざれば、乃ち疆涅の陂を潰りて人を宇わさば、焉ち今に抵るも郢と曰う。

『楚居』によれば熊延から後の楚の世系は、熊勇―熊

敵―熊霜―熊雪―熊洵―熊罥―若敖・熊儀―蚡冒・熊師
―霄敖・熊鹿―武王・熊通となる。両者の間で相違して
いるのは、楚世家の側では熊敵の中子・仲雪は、「三弟立
つを争う。仲雪は死し、叔堪は亡げて難を濮に避く。而
して少弟季洵立つ」と、後継争いの中で死亡し、君位に
は就かなかつたとされるのに対し、『楚居』の側では君位
に就いたように記される点である。

相違点の第二は、楚世家では霄敖―蚡冒の順序である
のに対して、『楚居』の側では逆に蚡冒―霄敖の順序にな
っている点である。『楚居』の記述からは、若敖―都、蚡
冒―焚、霄敖―宵と、君主の名称と国都の名称との間に
は対応関係が読み取れる。それを承けて、「武王熊贖(通)
に至りて宵より徙りて免に居る」と述べられる点からす
れば、単純に『楚居』の側の誤記とも片付けられない。
一方の楚世家も、「二十七年、若敖は卒し、子の熊坎立つ。
是を霄敖と為す。霄敖は六年にして卒し、子の熊胸立つ。
是を蚡冒と為す。蚡冒十三年、晋始めて乱る。曲沃の故
を以てなり。蚡冒は十七年にして卒す。蚡冒の弟熊通は、
蚡冒の子を弑して代りて立つ。是を楚の武王と為す」と、
若敖の息子が霄敖であり、霄敖の息子が蚡冒であり、蚡
冒の弟が武王であると、その血縁関係を明示するから、
やはり単純な誤記とは思われない。このようにそれぞれ

に理がある以上、両者のいずれが正しい順序を伝えてい
るのかは、にわかには判断できない。

また楚世家の側は、姫姓の随を仲介者に立てた周王室
との交渉が不調に終わり、この事態に怒った熊通が自立
して王号を称するに至った経緯を詳述するが、『楚居』の
側はその経緯は一切触れない。これは『楚居』がもつぱ
ら国都の変遷を記す「居」であるとの文献上の性格から
くる当然の現象であろう。その一方で『楚居』の側は、
「衆は免に容らざれば、乃ち疆涇の陂を潰りて人を宇わ
さば、焉ち今に抵るも郢と曰う」と、楚都を郢と称する
ようになったのは武王の代に始まるとして、その由来を
解説する。後述するが、楚世家は初めて郢に都を置いた
のは文王熊贖だと記すから、この点に関しても両者の間
には食い違いが見られる。

楚世家は文王から成王までの世系を次のように記す。

子文王熊贖立。始都郢。(中略)十三年卒。子熊躰立。
是爲杜敖。杜敖五年、欲殺其弟熊惲。惲奔隨、與隨
襲弑杜敖代立。是爲成王。

子の文王熊贖立つ。始めて郢に都す。(中略)十三年
にして卒す。子の熊躰立つ。是を杜敖と為す。杜敖

の五年、其の弟熊惲を殺さんと欲す。惲は隨に奔り、隨と与に襲いて杜敖を弑して代わりて立つ。是を成王と為す。

この時期の国都の変遷を『楚居』は次のように記す。

至文王自疆涅(郢)遷(徙)居淋(郢) (和郢、和郢)遷(徙)居夔(夔)郢(夔郢、夔郢)遷(徙)居爲(郢) (爲郢、爲郢)遠(復) (8) 遷(徙)居免郢、女(焉) 改名之曰福丘。至臯(莊)囂(敖)自福丘遷(徙)表(夔)筓(都)郢。至成王自筓(都)郢遷(徙)表(夔)淋(淋)郢(和郢、和郢)遷(徙) (9) 居嬰(睽)郢。

文王に至りて疆郢より徙りて淋(和)郢に居り、淋(和)郢より徙りて夔郢に居り、夔郢より徙りて爲郢に居り、爲郢より復た徙りて免郢に居り、焉ち之を改名して福丘と曰う。莊(杜)敖に至りて福丘より徙りて都郢に襲る。成王に至りて都郢より徙りて淋(和)郢に襲り、淋(和)郢より徙りて (10) 睽郢に居る。

上述したように楚世家の側は、「子の文王熊賁立つ。始めて郢に都す」と、郢に初めて都を置いたのは文王だと記し、武王の代だとする『楚居』との間に食い違いを見せている。ただし文王―杜敖―成王との世系に関しては、両者の記述は一致する。

それでは続いて穆王から平王までの時期を見てみよう。楚世家はこの時期の世系を以下のように記録する。

多十月、商臣以宮衛兵圍成王。成王請食熊蹯而死不聽。丁未成王自殺。商臣代立。是爲穆王。(中略)十二年卒、子莊王侶立。(中略)九年、相若敖氏。人或讒之王。恐誅反攻王。王擊滅若敖氏之族。(中略)二十三年莊王卒、子共王審立。(中略)三十一年共王卒、子康王招立。康王立十五年卒、子員立。是爲鄭敖。(中略)圍入問王疾、絞而弑之。(中略)而圍立。是爲靈王。(中略)七年、就章華臺。下令內亡人實之。(中略)十二年春、楚靈王樂乾谿、不能去也。國人苦役。(中略)遂入殺靈王太子祿、立子比爲王。(中略)靈王於是獨傍徨山中。野人莫敢入王。(中略)夏五月癸丑、王死申亥家。(中略)是時、楚國雖已立比爲王、畏靈王復來、又不聞靈王死。故觀從謂初王比曰、不殺弃疾、雖得國猶受禍。王曰、余不忍。(中略)

初王及び子哲遂自殺。丙辰弃疾即位爲王。改名熊居。是爲平王。

冬十月、商臣は宮衛の兵を以て成王を囲む。成王は熊蹯を食いて死せんことを請うも聽かず。丁未に成王は自ら絞殺す。商臣代わりて立つ。是を穆王と爲す。(中略)十二年にして卒し、子の莊王侶立つ。(中略)九年、若敖氏を相とす。人或いは之を王に讒す。誅を恐れて反つて王を攻む。王は撃ちて若敖氏の族を滅ぼす。(中略)二十三年にして莊王卒し、子の共王審立つ。(中略)三十一年にして共王卒し、子の康王招立つ。康王立ちて十五年にして卒し、子の員立つ。是を邲敖と爲す。(中略)圉は入りて王の疾を問ひ、絞りて之を弑す。(中略)而して圉立つ。是を靈王と爲す。(中略)七年、章華台を就る。令を下し亡人を内れて之を実たす。(中略)十二年春、楚の靈王は乾谿を樂しみて、去ること能わず。国人は役に苦しむ。(中略)遂に入りて靈王の太子祿を殺し、子比を立てて王と爲す。(中略)靈王は是に於いて独り山中を傍徨す。野人は敢えて王を入るるもの莫し。(中略)夏五月癸丑、王は申亥の家に死す。(中略)是の時、楚国は已に比を立てて王と爲すと雖も、靈王の

復た來たらんことを畏れ、又た靈王の死するを聞かず。觀従は初王比に謂いて曰く、弃疾を殺さざれば、国を得ると雖も猶お禍を受けんと。王曰く、余は忍びずと。(中略)初王及び子哲は遂に自殺す。丙辰に弃疾は位に即きて王と爲る。名を熊居と改む。是を平王と爲す。

ここには、穆王—莊王—共王—康王—邲敖—靈王—初王比—平王と続く楚の世系が記される。これに対して『楚居』は、この時期の世系を次のように記録する。

至穆王自嬰(睽)郢遷(徙)表(襲)爲郢。至臧(莊)王遷(徙)表(襲)夔(郢)爲郢。樊郢、樊郢遷(徙)居同宮之北。若鬻(敖)迨(起)禍、玄(焉)遷(徙)居承(蒸)之野(蒸之野、蒸之野)□□□、□(10)表(襲)爲郢。至鞏(共)王、康王、罃(嗣子)王皆居爲郢。至靈(靈)王自爲郢遷(徙)居秦(乾)溪之上、以爲尻(處)於章「華之臺」。【(11)競(景)坪(平)王卽立(位)、猷(猶)居秦(乾)溪之上。

穆王に至りて睽郢より徙りて爲郢に襲る。莊王に至

りて徙りて樊郢に襲り、樊郢より徙りて同宮の北に居る。若敖は禍を起さば、焉ち徙りて蒸の野に居る。蒸の野□□□、□為郢に襲る。共王・康王・嗣子の王に至るまでは、皆為郢に居る。靈王に至りて為郢より徙りて乾溪の上に居り、以て章華の台に処ると為す。景平王即位するも、猶お乾溪の上に居る。

『楚居』によればこの時期の楚の世系は、穆王―莊王―共王―康王―嗣子王―靈王―景平王となる。両者が記す世系はほぼ一致するが、主要な違いとしては、康王の息子・熊員を楚世家は郊敖と表記するのに対して、『楚居』の側は嗣子王と表記する点が挙げられる。また楚世家は共王の息子で康王の弟である子比が靈王に代わる新王として即位したと記すが、『楚居』の側はそれを公式の即位とは認めていないようで、初王比に関する記述は見られない。

それでは続いて昭王から悼王までの時期を見てみよう。楚世家はこの時期の世系を以下のように記録する。

十三年平王卒。將軍子常曰、太子珍少。且其母乃前太子建所當娶也。欲立令尹子西。子西平王之庶弟也。

有義。子西曰、國有常法。更立則亂。言之則致誅。乃立太子珍。是爲昭王。(中略)庚寅昭王卒於軍中。(中略)乃與子西・子綦謀、伏師閉塗迎越女之子章立之。是爲惠王。然後罷兵歸、葬昭王。(中略)白公自立爲王。月餘會葉公來救楚。楚惠王之徒、與共攻白公殺之。惠王乃復位。(中略)五十七年惠王卒、子簡王中立。(中略)二十四年簡王卒、子聲王當立。聲王六年、盜殺聲王。子悼王熊疑立。(中略)二十一年悼王卒、子肅王臧立。

十三年にして平王卒す。將軍子常曰く、太子珍は少し。且つ其の母は乃ち前の太子建が當に娶るべき所なりと。令尹の子西を立てんと欲す。子西は平王の庶弟なり。義有り。子西曰く、國に常法有り。更め立つれば則ち乱る。之を言わば則ち誅を致さんと。乃ち太子珍を立つ。是を昭王と爲す。(中略)庚寅に昭王は軍中に卒す。(中略)乃ち子西・子綦と謀り、師を伏せ塗を閉じ、越女の子・章を迎えて之を立つ。是を惠王と爲す。然る後に兵を罷めて歸り、昭王を葬る。(中略)白公は自立して王と爲る。月余にして葉公の來りて楚を救うに會う。楚の惠王の徒は、与に共に白公を攻めて之を殺す。惠王は乃ち位に復す。

に復る。東大王は疆郢より徙りて藍郢（らんえい）に居り、藍郢より徙りて鄢郢（はんえい）に居り、鄢郢より鄢に復る。王太子は邦を以て鄢郢に居り、以て戡郢に居ると為す。悼哲王に至るも猶お鄢に居る。中謝は禍を起こさば、焉ち徙りて肥遺に襲る。邦は大いに瘠せて、焉ち徙りて鄢郢に居る。

『楚居』によればこの時期の世系は、昭王―献惠王―東大王―王太子（声王）―悼哲王となる。やはり『楚居』も白公勝を正式の楚王とは認めていない。また声王については、王太子と表記するのみで、楚世家のように諡号を記さないとの違いが見られる。『楚居』は恵王の代に關しても、恵王と王太子（後の簡王）が居所を別にして行動し、王太子の側が政府の行政組織を引率していたと記すが、これは白公の乱に際し、「白公勝は怒る。乃ち遂に勇力の死士・石乞等と与に、襲いて令尹子西・子綦を朝に殺す。因りて恵王を劫かし、之を高府に置き、之を弑せんと欲す。恵王の従者・屈固は王を負い、亡げて昭王の夫人の宮に走る」と、恵王が国都を脱出して辛くも難を逃れていた状況を伝えているのであろう。

これまで『楚居』と『史記』楚世家を比較してきた。それによって、若干の食い違いは見られるものの、両者

が記す世系がほぼ一致するとの結果が得られた。この点は、司馬遷がかなり信憑性の高い史料を用いて楚世家を記述したことを裏付けるものとなろう。だがその一方で、両者の間にいくつかの重要な食い違いが存在するのもまた事実なのであつて、『楚居』が楚人自らが楚の履歴を語った文献である点を重視すれば、なぜこうした相違が生じたのかを究明する作業が今後必要となろう。

三

続いて『楚居』の発見がもたらす新たな知見をいくつか選んで、簡単な紹介を試みるが、その前に『楚居』のおよその成書時期について考えてみよう。『楚居』が記す楚の世系は悼王（在位…前四〇一年～前三八一年）までで終わっている。したがって『楚居』は、次の肅王（在位…前三八〇年～前三七〇年）の時代以降に制作されたと推定できる。清華簡の年代に關しては、北京大学・加速器質譜実験室及び第四紀年代測定実験室が炭素十四による年代測定を行ったが、その結果は「紀元前三〇五年±三〇年」であった。この測定値は竹簡を試料として得られたものである。したがって『楚居』の書写年代も、前記測定値の中心値である前三〇五年前後となる。一方

『楚居』の原本が肅王在位中の前三七五年頃に作られたと仮定すれば、原本『楚居』の成立から清華簡『楚居』が書写されるまでの期間は、約七十年前後となる。

もし原本『楚居』の制作時期が肅王の代ではなく、次の宣王（在位…前三六九年～前三四〇年）の時代まで降るとすれば、原本の成立から清華簡『楚居』の書写年代までの期間は、より短く四十年から五十年ほどとなる。いずれにせよ『楚居』の制作年代は、戦国前期（前四〇三年～前三四三年）の幅に収まる可能性が高いであろう。

『楚居』がもたらした新たな知見の第一は、楚と殷との間に深い関係があったと記す点で、これは伝世文献には見られなかった記述である。楚世家は楚と周の密接な関係を度々叙述する。

A 周の文王の時、季連の苗裔を鬻熊と曰う。鬻熊の子は文王に事う。蚤く卒す。其の子を熊麗と曰う。熊麗は熊狂を生む。熊狂は熊繹を生む。熊繹は周の成王の時に当たる。文武の勤勞の後嗣を挙げ、而して熊繹を楚蛮に封じ、封ずるに子男の田を以てす。

B 周の夷王の時に当たり、王室は微にして、諸侯或いは朝せずして相伐つ。熊渠は甚だ江漢の間の民の和

を得る。乃ち兵を興して庸と楊粵を伐ち、鄂に至る。熊渠曰く、我は蛮夷なり。中国の号諡に与らずと。

乃ち其の長子康を立てて句亶王と為し、中子紅を鄂王と為し、少子執疵を越章王と為す。皆江上の楚蛮の地に在り。周の厲王の時に及びて暴虐なり。熊渠は其の楚を伐たんことを畏れ、亦た其の王を去る。

C

三十五年、楚は隨を伐つ。隨曰く、我は罪無しと。

楚曰く、我は蛮夷なり。今諸侯は皆叛くを為し、相侵し或いは相殺す。我は敝甲有り。以て中国の政を觀んと欲す。王室に請いて吾が号を尊くせよと。隨人は為に周に之き、楚を尊くせんことを請う。王室は聴かず。還りて楚に報ず。三十七年、楚の熊通怒りて曰く、吾が先の鬻熊は文王の師なり。蚤く終わる。成王は我が先公を挙げ、乃ち子男の田を以て楚に居ら令む。蛮夷は皆率い服せり。而るに王は位を加えず。我は自ら尊くせんのみと。乃ち自立して武王と為り、隨人と盟いて去る。是に於いて始めて濮の地を開きて之を有つ。五十一年、周は隨侯を召して數むるに楚を立てて王と為すを以てす。楚は怒り、隨の己に背くを以て隨を伐つ。武王は師中に卒して兵罷む。

Cで熊通は周の統制力の衰退を指摘し、中国世界に武力介入して秩序を回復せんと¹の意志を示した上、楚の称号を格上げするよう要求する。Aは楚は子爵・男爵相当の格付けで封建された²と記し、熊通もそうした過去に言及するから、恐らく熊通は公爵もしくは侯爵のランクへの格上げを要求したのだと思われる。だが周の桓王はその要求をあつさり拒絶する。そこで熊通は激怒し、前七〇六年に自立して王号を称するに至る。この時点で楚は周の封建体制から完全に離脱し、Bでは頓挫した称王をついに実現したのである。かくして君主の称号を基準にすれば、楚王と周王は全く同等・同格となった。もとより周は、初めて天下に二王が並び立つ事態になったことに強い不快感を示し、仲介に立った隨に対し、「周は隨侯を召して数³むるに楚を立てて王と為すを以てす」と、その責任を糾弾したのである。

この段階で楚は、周への対抗心から、周の前に天下を統治していた殷と自己を繋ぐ系譜を創作した可能性がある。季連が殷王・盤庚の子の娘・妣佳を妻に迎え、経伯と遠仲の兄弟を生んだとする『楚居』の記述は、そうした意図で作られた伝承だと考えられる。楚の昭王が大兵を引き連れて周の国境で観闋式を行い、周の定王の使者に鼎の軽重を問うたのも、楚と周は同格・対等であると

の意識の発露に他ならない。今回の『楚居』の発見によって、楚人が自分たちは殷の血統を継承する者であるとの伝承を、彼等の精神的支柱にしていた状況が初めて判明したわけである。

楚の称王は、その後の中国世界に深刻な歪みをもたらす事態を招いた。中国の諸国家は、自らを周王から封建された諸侯と規定し続ける一方で、周から自立して王号を称する楚にも対処しなければならなくなったからである。楚の軍事力は強大さを増し、楚王はしばしば軍を北上させて中原諸国と戦ったり、同盟を結んだりした。こうなると、楚の称王を自分たちとは無縁の世界での出来事だとして無視することはできず、現実には王号を名乗る楚と交渉を持たざるを得ない状況に追い込まれてしまう。観念的建前としては、周王のみが唯一の王であるべきなのだが、眼前には王号を称する楚が実在し、その称王を容認した上で外交交渉を行わざるを得ない。

すなわち中国世界の人々は、「攻戦を飾る者の言に曰く、南は則ち荆呉の王、北は則ち斉晋の君、始めて天下に封ぜらるるの時、其の土地の方は、未だ数百里有るに至らず、人徒の衆きことは、未だ数十万人有るに至らざるなり」(『墨子』非攻中篇)と、一方では楚や呉も斉や晋と同じく周から封建された国家であると述べながら、他方

では楚や呉の君主を王と呼ぶ事態、王号を名乗る諸侯といった前代未聞の存在に直面する事態を余儀なくされたのである〔注17〕。『春秋左氏伝』も、「息侯は之を聞きて怒る。楚の文王に謂わしめて曰く、我を伐て。吾は救いを蔡に求めん。而して之を伐たんと。楚子は之に従う」（莊公十年）と、楚を「楚子」と表記してあくまでも子爵の国として扱おうとしながらも、同時に楚の君主を「文王」と表記しなければならぬ矛盾にはまり込んでゐる。「孔子春秋を成りて乱臣・賊子は懼る。詩に云く、戎狄是れ膺ち、荆舒是れ懲らす。則ち我を敢えて承むるもの莫し」（『孟子』滕文公下篇）と、蛮夷に対する激しい敵愾心を表明する孟子の言説にも、この歪みへの強い嫌悪感が露呈している。

前七〇六年に楚が称王した後、前五八五年に呉の壽夢が、前四九七年に越の勾踐が楚に倣つて王号を称したため、中国世界の歪みはますます増大した。中原諸国は、自らを周の封建体制中に位置づける意識に強く拘束され続けたため、「我は蛮夷なり。中国の号諡に与らず」（楚世家）というわけには行かず、なかなか称王に踏み切れなかったのだが、ようやく戦国中期に至つて魏の恵王や斉の威王が称王を決行し、最終的には七雄と宋・中山までが相次いで王号を称する事態が出現する〔注18〕。これも

春秋時代の長江流域における楚・呉・越の称王が前例となつていたのであり、とりわけ最初に称王を断行した楚が果たした役割は大きな意義を持つ。その意味で、楚の始祖と殷王・盤庚との姻戚関係を語る『楚居』の記述は、従来知られていなかった形での楚人の自立意識を示す資料として注目すべきであろう。

新たな知見の第二は、「楚人」なる名称の由来が、楚人自身によつて語られている点である。『楚居』は楚人なる名称の由来を、「麗は従い行かずして、潰りて脅（胸）より出づ。妣列は天に賓せられんとし、巫咸は其の脅（胸）を該むに楚を以てすれば、今に抵るも楚人と曰う」と説明する。妣列の裂けた胸を楚で包合したから楚人と称するといふのでは、一見したところ、あまり楚人の箔付けにはなりそうもない印象を受ける。しかしこの説話の主眼は、むしろ麗季が母親の身体を破り裂いて誕生してきたとする、異常生誕の側に存するのである。

楚世家は「陸終は子六人を生む。坼剖して焉を産む。其の長ずるや一を昆吾と曰い、二を參胡と曰い、三を彭祖と曰い、四を會人と曰い、五を曹姓と曰い、六を季連と曰う。半姓なり。楚は其の後なり」と、陸終の子供六人が母親の身体を破り裂いて生まれてきたとの伝承を記

す。とすれば、楚の始祖たる季連自身も、やはり母親の体を破つて生まれてきたことになる。この種の異常生誕説話には、奇怪な形態で誕生してきた子供には、生まれつき神秘的な力が備わっており、通常の形で生まれてきた常人を遙かに超えた存在だと示唆する機能が込められている。したがって『楚居』が記す麗季の聖誕伝説も、楚人は神秘的な力を備えた格別の存在だと主張するための仕掛けと考えられる^(注19)。

新たな知見の第三は、従来一つだと考えられてきた郢都が、実は十四も存在したと記す点である。『楚居』の最大の特徴は、歴代の楚の君主がどこに居たのか、どこに都を置いたのかを詳細に記録する点にあるが、それによれば君主の居所の変遷は、颯山—驕山—爰陂—方山—之泮—京宗—載水上流—京宗—夷屯—発漸—旁岬—喬多—都—樊—宵—免—疆郢—淋(和)郢—樊郢—為郢—免郢(福丘)—都郢—淋(和)郢—□□—睽郢—為郢—樊郢—同宮之北—蒸之野—□□—為郢—乾溪之上(章華之台)—嫩(美)郢—鶻郢—為郢—乾溪之上—嫩(美)郢—為郢—淋(和)郢(肥遺・酉(醜)瀉)—鄢郢—郢岬—淋(和)郢—疆郢—藍郢—鄢郢(戡郢)—肥遺(淋(和)郢)—鄢郢となる。

楚の都が郢に置かれたのは頃襄王の時代が最後で、前二七八年に秦将・白起が郢(紀南城)を占領した後、楚は都を陳(河南省淮陽)に遷した。これまでは楚が紀南城に国都を定める以前の国都はどこだったのが問題とされてきた。しかし今回発見された『楚居』によって、実は郢と呼ばれた国都が多数存在しており、頻繁に遷都が繰り返されていた状況が明らかとなった。中には「昭王に至りて乾溪の上より徙りて嫩(美)郢に居り、嫩(美)郢より徙りて鶻郢に居り、鶻郢より徙りて為郢に襲る。鬪廬郢に入らば、焉ち復た徙りて乾溪の上に居る。乾溪の上より復た徙りて嫩(美)郢に襲る」といったように、一代の間に五回も遷都した例が見られる。今後歴史地理学の分野では、多数に上る郢都それぞれの地点を特定したり、遷都の理由を探る研究が進められるものと予想される。

新たな知見の第四は、『楚辞』離騷に登場する彭咸についての手掛かりを提供する点である。『楚辞』離騷の主人公は屈原がモデルの靈均である。靈均は「帝高陽の苗裔、朕が皇考を伯庸と曰う。(中略)余を名づけて正則と曰い、余に字して靈均と曰う」と、帝顓頊高陽を始祖と仰ぐ楚の王族の一員である。靈均は楚の安泰と長久を願い、多

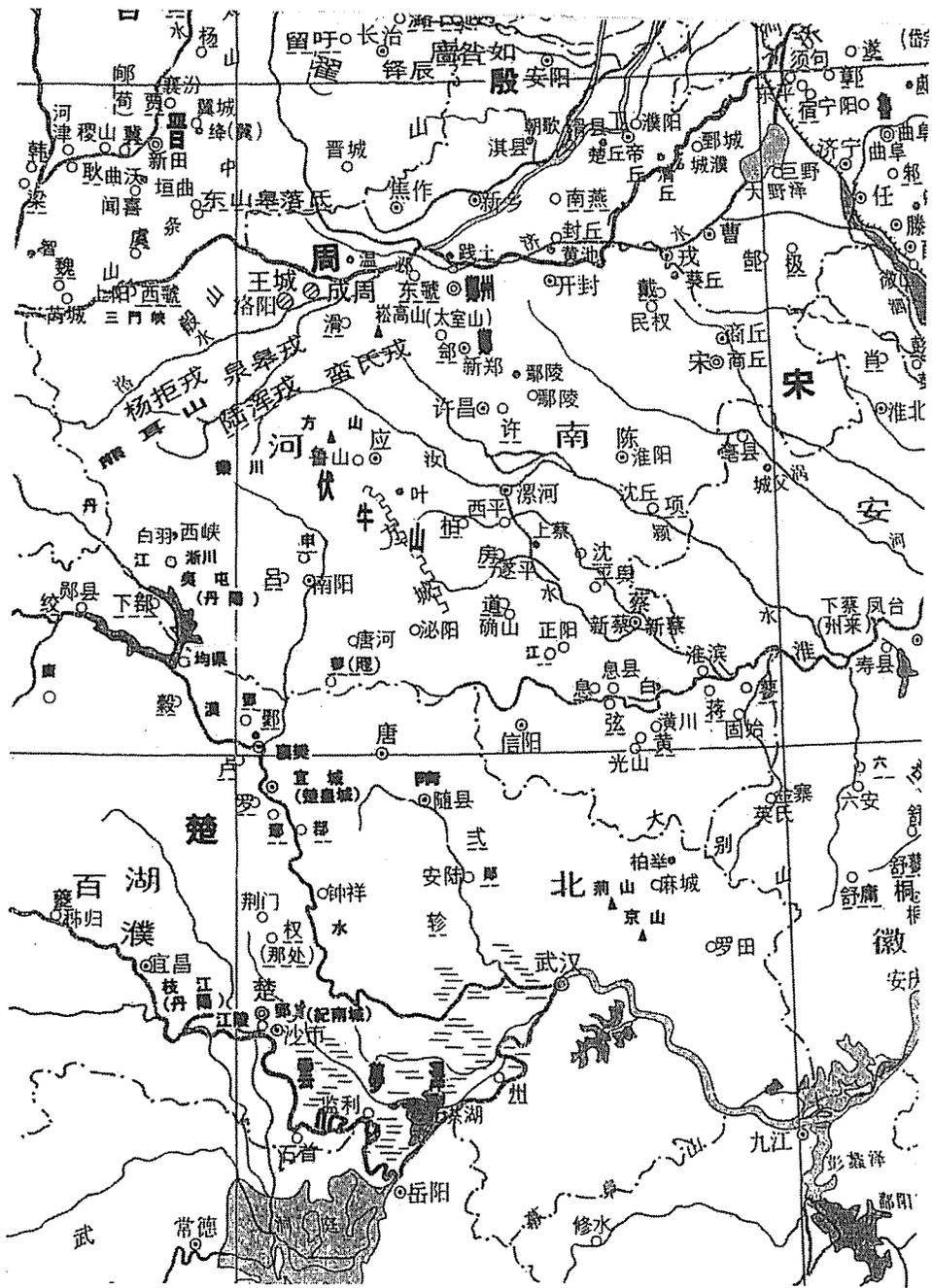
くの人材を養成して楚国の政治を正そうとするが、王を取り巻く党人たちに阻まれて実現できない。絶望した靈均は、「今の人に周あつわらずと雖も、願わくば彭咸の遺則に依らん」と、楚の長久を図った古代の賢人であり、敬慕して止まない彭咸の遺訓に従い、「体解すと雖も吾は猶お未だ変ぜず」と、死を覚悟してでも潔白な生き方を貫こうと決意する。その後、楚の現実に望みを絶たれた靈均は、自分を受け容れてくれる理想の君主を捜し求めて、天界を世界の果てまで飛翔し続けるが、ついにそうした君主に出会えぬまま、ふと楚国の上空にさしかかる。従者たちは故郷を懐かしがって楚に帰還しようとするが、靈均は「国に人無く我を知る莫し。又た何ぞ故都を懐わん」と、楚都・郢には決して戻らぬ決意を述べ、「既に与に美政を為すに足る莫し。吾は將に彭咸の居る所に従わんとす」と宣言して離騷は終結する。

離騷に二度登場する彭咸は、他の文献には全くその名が見えず、誰を指すのかは不明のまま、研究者を悩ませてきた^{註20}。後漢の王逸は「彭咸は殷の賢大夫。其の君を諫むるも聴かれず。自ら水に投じて死す」と注解するが、根拠不明の憶測に過ぎず、楚の懷王を諫めて聴かれずに追放され、汨羅に身を投じた屈原伝承に合わせた作文の疑いが残る。ところが今回発見された『楚居』に

は、「麗は従い行かずして、潰りて脅（胸）より出づ。妣列は天に賓せられんとし、巫咸は其の脅（胸）を該むに楚を以てすれば、今に抵るも楚人と曰う」と、「巫咸」なるシャーマンが登場する。巫咸は妣列の胸を楚で包合した機転により、楚人なる呼称の生みの親になったとされており、離騷では靈均に再度の飛翔を促す役を演じている。

その一方、楚世家は、「陸終は子六人を生む。圻剖して焉を産む。其の長ずるや一を昆吾と曰い、二を參胡と曰い、三を彭祖と曰い、四を會人と曰い、五を曹姓と曰い、六を季連と曰う。半姓なり。楚は其の後なり。昆吾氏は夏の時に嘗て侯伯と為る。桀の時湯は之を滅ぼす。彭祖氏は殷の時に嘗て侯伯と為る。殷の末世に彭祖氏を滅ぼす」と、楚の始祖たる季連の兄が彭祖で、彭祖氏は殷の時代に諸侯となり、殷の末期に周によつて滅ぼされたという。

したがつて楚人なる呼称の生みの親である巫咸伝説と、楚の始祖たる季連の兄である彭祖伝説とが後に混淆されて、楚の安泰と永続を図り続けた古代の賢人としての彭咸伝説に転訛した可能性を考えるべきであろう^{註21}。『楚居』が楚の始祖たる季連は殷王と姻戚関係にあり、季連の息子たちは殷王の血筋を受け継いだと記すことも、そ



清華簡『楚居』關係地圖

の可能性を高めるものと思われる。

新たな知見の第五は、楚国が形成されて行く過程について、貴重な手掛かりを提供する点である。『楚居』は楚の起源を「季連は初めて颯山に降り、穴窮するに抵る。趨みて驕山に出で、爰陂に宅処す。洎水を逆上り、盤庚の子に見ゆるに、方山に処る。女を妣佳と曰い、慈を秉りて善く相け、四方に歴遊す。季連は其の聘有るを聞き、従いて之泮に及び、爰に緹伯・遠仲を生む。遊ぶこと徜徉にして、先に京宗に処る。穴熊は遅れて京宗に徙り、爰に妣列を得て、載水を逆流るに、厥の状は撰するのみ。乃ち之を妻り、偁叔・麗季を生む」と語る。そこには楚世家が記す黄帝から陸終までの系譜は見られないのであるが、何の説明もないまま、いきなり季連が登場する唐突な始まり方は、かえって楚世家が冒頭に記すような系譜が、暗黙の前提とされていたことを示唆するであろう。

そう考えると、帝顓頊高陽の末裔たる季連が颯山に降つて穴居生活を始めたとするのは、貴種流離譚の一種となる(注23)。これはもとより楚の原氏族を箔付けするための神話であるが、例えば楚がもともとは中原と接触する可能性がある河南方面から南方に移動してきた氏族であるといった、なにがしかそれに類する実態を反映するの

か、あるいは全く何の実態も踏まえない架空の神話であるのかは、現段階では詮索の術がない。季連が盤庚の子の娘・妣佳を妻にしたとの伝説も、やはり箔付けの機能を果たすが、これも東方から河南・安陽へと移動してきた殷と楚の原氏族の間に何らかの接触があった事実の反映なのか、それとも全くの作り話なのかは、やはり判然としない。

穴熊が京宗に移住して妣列を娶ったとする記述は、楚の原氏族が近隣の氏族との通婚を重ねて、しだいに氏族連合を形成して行った状況を物語っている。「熊繹と屈糾に至りて都喙をして卜せしめて夷屯に徙り、便室を為るに、室既に成るも、以て之に内るるもの無ければ、乃ち都人の踵を窃みて以て祭る」として登場する都人は、そこに描かれる性格から、もっぱら龜卜や宗教祭祀を司る特異な氏族と思われるが、やはり都人も楚人との通婚により、いまだ京宗に居た段階で楚を中核とする氏族連合に加わった氏族だと推測される。「若敖・熊儀は徙りて都に居る」(『楚居』)とか、「熊罥は九年にして卒し、子の熊儀立つ。是を若敖と為す」「九年、若敖氏を相とす。人或いは之を王に讒す。誅を恐れて反つて王を攻む。王は撃ちて若敖氏の族を滅ぼす」(楚世家)と、都人は楚の王権に巫祝王たる神性を付与する有力な人間集団として楚

を支え、前六〇五年の滅亡まで大きな影響力を振るい続けた^(注23)。

また京宗から夷屯への移動に関して、屈紃なる人物が登場する点も注目し得る。屈氏は武王の子が屈邑に封ぜられてより、楚の王族の一つとして重要な役割を果たし続けたとされるが、『楚居』の記述によれば、武王の時代よりも遙か以前、すでに熊繹の時代から楚の中樞で活動していたことになる。これがむしろ実相に近く、屈氏も早い段階で楚の氏族連合に加わった有力氏族だったのか、それとも春秋以来の名族である屈氏が自己の来歴を遡らせるために、そうした伝承を創作して加上したのかは、今のところはつきりしない^(注24)。

『楚居』には、「衆は免に容らざれば、乃ち疆渥の陂を潰りて人を宇わさば、焉ち今に抵るも郢と曰う」「若敖は禍を起さば、焉ち徙りて蒸の野に居る」「鬬廬郢に入らば、焉ち復た徙りて乾溪の上に居る」「白公は禍を起さば、焉ち徙りて湫(和)郢に襲り、改めて之を為りて、焉ち肥遺と曰う」「中謝は禍を起さば、焉ち徙りて肥遺に襲る。邦は大いに瘠せて、焉ち徙りて鄢郢に居る」などと、人口増加や反乱、敵軍の侵攻といった遷都の理由が明示される場合がある。だが理由が示されない遷都の側が圧倒的に多い。

武王が疆郢に都を置くまでの遷都は、「若敖・熊儀は徙りて都に居る」とされる都が江陵より遙か北の河南・浙川(商密・上郢)にあつて、均県で漢水に合流する丹江沿いに位置すること、「熊繹と屈紃に至りて都を遷して卜せしめて夷屯に徙る」「熊只・熊廼・熊樊及び熊錫(楊)・熊渠に至るまでは、尽く夷屯に居る」とされる夷屯(丹陽)も、やはり河南・浙川の丹江北岸にある点などから推測するに、楚の原氏族が通婚によって氏族連合を拡大しつつ、驍山・驕山(殺山)・方山(外方山)といった河南西部の山岳地帯から、丹江や漢水伝いに湖北・江陵に進出して、莫大な山林藪沢の利を掌握できる雲夢沢一帯を支配するまでの南進過程と理解することが可能であろう^(注25)。しかしそれだけでは、武王以降もなぜ頻繁に遷都が繰り返されたのか、その理由を説明するのは難しい。江陵地域に国都を定めて以降、楚はかつて南下してきた漢水沿いのルートを逆に北上する形で、鄧・申・江・六・蓼・庸・陸渾の戎などを滅ぼし、さらに鄭と結んで陳や宋に侵攻して、鄭を自己の影響下に置き続けようとする晋と覇権を争うようになる。だが楚の中原進出に伴い、国都が江陵地域を離れ、大きく北方に移動した形跡はない^(注26)。楚にとつて最も重要な聖域・祭場である雲夢沢を巫祝王として独占的に管理し、なおかつそこから

上がる山林藪沢の利を王室財政に聚斂し続ける営為が、宗教政策上も経済的にも楚の王権維持にとっては必須の要件だったため、国都を江陵地域から大きく北方に移動させるわけには行かなかつたのだと考えられる〔注27〕。したがって武王以降も繰り返された遷都を、楚の中原進出に伴う軍事的要請と結び付ける解釈も、やはり難しいと言わねばならない。

楚では長子相続のルールが確定しておらず、「摯紅卒するに、其の弟弑して代わりて立つ。熊延と曰う」「三弟立つを争う。仲雪は死し、叔堪は亡げて難を濮に避く。而して少弟季洵立つ。是を熊洵と為す」とか、「蚡冒の弟熊通は、蚡冒の子を弑して代りて立つ。是を楚の武王と為す」「杜敖の五年、其の弟熊惲を殺さんと欲す。惲は隨に奔り、隨と与に襲いて杜敖を弑して代わりて立つ。是を成王と為す」「圉は入りて王の疾を問い、絞りて之を弑す。(中略)而して圉立つ。是を靈王と為す」(楚世家)と、兄弟で君位を争って末弟が即位した例や、弟が兄の子を殺して即位した例が目立つ。

こうした形での君位の継承は、当然新たに即位した君主に対し、怨みや敵意を抱く勢力を生ずる結果を招く。武王以降も頻繁に繰り返された遷都の背景には、敵対勢力の反撃を避けて国都を離れ、自己の采邑の近辺や、支

持勢力の地盤近くに都を遷す必要性が存在した可能性を想定し得るであろう。今後は、多数に上る郢都それぞれの地点を特定する研究とともに、こうした方面からの研究も、大いにその進展が期待される。

小論では新出の清華簡『楚居』を取り上げ、それが今後の研究の進展にもたらすであろう知見をいくつか選んで紹介してみた。もとよりこれは、全くの初歩的考察に過ぎない。とりあえず『楚居』の発見が持つ重要な意義をなるべく早く報告することを目的としたので、不十分な点が少々残されている。読者諸賢の御寛容を願う次第である。

注

(1) この文字を整理者は「前」に隸定するが、「網摘・《清華一》專輯」で劉雲氏が「趣」に釈読するのに従った。

(2) 整理者はこの文字を「率」に隸定し、原注は「率」を「奉順」の意に、「相」を「品質」の意味に取る。これに対し「網摘・《清華一》專輯」で孟蓬生氏は、「率」を「俊」の意に解し、妣佳の容貌が他の女性に卓越している意味に解釈する。また王寧氏は「率」を「類」に釈読した上で、「善」の意味に取り、やはり妣佳が美貌の持ち主だったとの意味に

取る。今、「率」については王寧説に従って「善」の意に釈し、「相」については私見により「輔佐」の意味に解釈した。

(3) 原注は普通により「晉」を「麗」に、「曹」を「秀」に釈して、妣佳の美貌が四方の女子に秀でていた意味に取る。これに対し「綱摘・清華」專輯で單育辰氏は、「晉曹」は「盤遊」に読むべきだとする。また蔡偉氏は「晉」と「歴」は古音が近いから「歴遊」に読むべきだとする。ここでは蔡偉説に従って「歴遊」に読んで置く。

(4) 整理者は「媼」を「媼」字だとした上で「遊」に釈読する。また「糞」を「徇」に、「羊」を「祥」に釈読した上で、「徇祥」を「戲蕩」「遊戯」の意に解する。ただし整理者は、「媼徇祥」とした場合は、生育が順調だとの意味にもなり得るとの別解を提示する。これに対して劉雲氏は「綱摘・清華」專輯において、「媼糞羊」を子孫が繁栄する意に取る守彬氏の説を紹介した上で、「媼」は「生育」の意味ではなく、子孫・後嗣の意であり、「糞羊」は「長永」の意であるとして、「媼糞羊」を季連の子孫が末永く続いた意味だとする見解を示す。劉雲説を採った場合は、季連と穴熊の間に長大な時間の隔たりが生ずることになり、「先」と「遅」の対比が意味を持たなくなるので、ここでは整理者が「媼」を「遊」に釈読するのに従い、「游徇祥」をゆっくりあちこち

ちを経巡りながらの意味に解釈して置く。なお「徇祥容與」はゆつたりとして気の長いさまを表す。

(5) 整理者は「京宗」は漳水の発源地である「荊山」の首峰「景山」と関係があるかも知れないと指摘する。また「清華簡」楚居」研讀札記」は「京宗」を今の湖北京山一帯を指す可能性があるとし、その中の京源山と「京宗」は関係があるかも知れないと言う。だが盤庚の子が居たとされる「方山」(外方山)は、洛陽から南へ八十キロメートルほど下った河南の地にある。そこで「京宗」も、湖北ではなく河南にあった可能性が高い。若敖・熊儀は徙りて都に居るとか、「熊繹と屈紃に至りて都喩をして卜せしめて夷屯に徙る」「熊只・熊祖・熊樊及び熊錫(楊・熊渠に至るまでは、尽く夷屯に居る」と語られる都(商密・上郟)や夷屯(丹陽)は、いまだ河南・浙川の地にあり、それよりも遙かに時代が遡る季連の段階で、すでに湖北東部に進出していた可能性は低い。『楚居』の記述により、楚人がかなり長期にわたって河南の地に留まっていた状況が明らかになったから、「京宗」は浙川の北、河南西部の熊耳山や伏牛山の近辺、欒川の辺りを指すのではないかと思われる。

(6) 「熊」は金文では「禽」字で表記される。そこで本稿では「禽」はすべて「熊」に改める。

(7) 「清華簡」楚居」研讀札記」は「威」を「厲」と読み、古

代部族の厲山氏（列山氏・烈山氏）と関係があるとした上で、「威」を「列」に釈読する。今これに従って「威」を「列」に読んで置く。

(8) 整理者は「體」を「脅」に隸定するが、私見によりさらに「胸」に釈読した。

(9) 整理者はこの「焉」を上文に繋げるが、「綱摘」・《清華一》「專輯」で高佑仁氏が下文に続けて読むべきだと指摘するのに従って改めた。

(10) 「清華簡《楚居》研讀札記」は、「淋」は「和」の繁体字だとする。今これに従い、「淋」を「和」に隸定して置く。

(11) 整理者は「媿」を「嫩」に隸定するが、本稿ではさらに「美」に隸定して置く。

(12) 「酉」は私見により「酢」に隸定して置く。

(13) 原注は「中謝」を楚の官名で「侍御之官」とする。ただし『史記』楚世家には、「中謝起禍」に該当する事件の記載はない。

(14) 『史記』楚世家には「十一年、三晉伐楚、敗我大梁楡闕。楚厚賂秦、與之平」との記述が見える。「邦大瘡（瘡）」とはこの事件を指すのかも知れない。

(15) 丹陽の位置については、湖北省江陵西方の枝江とする南方説と、河南省浙川とする北方説が対立してきて決着を見なかった。今回の『楚居』の発見により、北方説の正しさを

が確定的となった。なおこの問題に関しては、谷口満「楚都丹陽探索—古代楚国成立試論—」（『東北大学東洋史論集』第一輯・一九八四年）参照。

(16) 原注は穴熊と鬻熊を同一人物だとするが、それでもなお空白期間の問題は解消されない。

(17) 中原諸国から見れば、楚が王号を僭称する諸侯と映ったのは当然である。一方の楚の側も、王号を称しながらも、自らを諸侯と位置づけていた。上博楚簡『東大王泊旱』は、「簡大王は旱に迫られ、亀尹羅に命じて大夏に貞わしめて、王自ら卜に臨む」と、楚の君主を王と呼ぶ一方で、「此れ謂う所の旱母なり。帝は將に之に命じ、諸侯の君の治むること能わざる者を修めて、之に刑するに旱を以てせんとす」と、簡大王を「諸侯之君」と規定する。したがって楚が名乗った王号は、決してただ一人天下を統治する天子の意味ではない。上博楚簡『昭王與龔之牌』は、前五〇六年に呉の遠征軍が楚都郢を攻略した事件を、「霸君吳王は郢に廷至し、楚邦の良臣は骨を暴す所となる」と記述する。ここでは仇敵である呉の閹閻を「霸君吳王」と称している。つまり楚は呉の称王を承認していたのであり、この点からも長江流域の楚・呉・越が称した王号が王朝の天子の意味でなかったことは明確である。なおこの兩篇の詳細については、拙稿「上博楚簡『東大王泊旱』の災異思想」（『集刊東洋学』

第四百号・二〇〇八年)、及び湯淺邦弘「語り継がれる先王の故事―『昭王與龔之旆』の文獻的性格―」(『中国研究集刊』第四十号・二〇〇六年) 参照。

(18) 戦国中期に中原で相次いだ称王の性格については、拙稿『春秋』の成立時期―平勢説の再検討―(『中国研究集刊』第二十六号・二〇〇一年) 参照。

(19) 周の建国神話では、「柞棫拔矣、行道允矣。混夷駟矣、維其喙矣」(『詩経』大雅・文王之什・檇)とか、「帝省其山、柞棫斯拔、松柏斯兗、帝作邦作對、自大伯王季」(『詩経』大雅・文王之什・皇矣)と、「柞」や「棫」といった棘のある低木は、文明の建設を邪魔する除去すべき対象、未開・野蛮の象徴とされている。この点を踏まえれば、周人が「楚人」とか「荊人」の呼称を用いる場合は、対象を侮蔑する意味が込められていたであろう。だが『楚居』が語る「楚人」の由来からは、楚人にとつて「楚人」なる呼称が決して蔑称とは意識されていなかった状況が判明する。楚人は周人が用いた蔑称を逆手に取り、楚が持つ棘の特性を巧みに利用して、前記のような建国神話、「楚人」の縁起話を作り上げたと考えられる。

(20) 『楚辞集解』所収の汪瑗「楚辞蒙引・彭咸弁」、朱子『楚辞弁証』上、王夫之『楚辞通釈』等。

(21) 彭祖伝説の詳細については、湯淺邦弘「上博楚簡『彭祖』における「長生」の思想」(『中国研究集刊』第三十七号・二〇〇五年) 参照。

(22) 『楚辞』天問には「伏匿穴處、爰何云。荊勳作師、夫何長」と、開国時代の楚の祖先が穴居生活を送っていたとする記述が見える。従前はこれがいかなる伝承に基づくのか不明であったが、今回の『楚居』の発見によって、楚の始祖である季連にまつわる伝承であったことが初めて明らかとなった。

(23) 莊王九年(前六〇五年)に滅亡した若人集団に関しては、谷口満「若敖・蚡冒物語とその背景―古代楚国の一理解―」(『集刊東洋学』第三十四号・一九七五年)、同「若敖氏事件前後―古代楚国の分解・その一―」(『史流』第二二号・一九八一年)、同「虎乳子文伝説の研究―春秋楚国の若敖氏について―」(『東北大学東洋史論集』第六輯・一九九五年) 等参照。

(24) 屈氏は武王の子である莫敖屈瑕に始まるとされる。原注は屈紆なる人物と屈氏は無関係だとするが、屈瑕以前に原屈氏とも言うべき氏族が存在していて、春秋期の屈氏がその名跡を継いだ可能性も残るであろう。

(25) 楚都郢都の位置については、春秋時代の郢を湖北省北部、襄樊の南約五十キロメートルの宜城楚皇城とし、戦国時代

の郢を湖北省の江陵紀南城とする北方説と、春秋・戦国期を通じて湖北省の江陵紀南城とする南方説とが対立してきていて、今に至るも決着を見ない。だが『楚居』は従来一つだと考えられてきた郢都が、実は戦国前期までにはすでに十四も存在したと記すから、今後この問題を考察するに際しては、根本的な発想の転換が必要となろう。なおこの問題に関しては、谷口満「江陵紀南城考―楚都郢の始建と変遷―」（『東北大学東洋史論集』第三輯・一九八八年）、同「紀南城考古知見の再検討」（『東北大学東洋史論集』第九輯・二〇〇三年）、高介華・劉玉堂『楚国的城市与建築』（湖北

教育出版社・一九九六年）、石泉『古代荆楚地理新探』（武漢大学出版社・一九八八年）、徐少華『荆楚歴史地理与考古探研』（商務印書館・二〇一〇年）等参照。

(26) 北方に対する軍事展開の利便性のみを考慮した場合は、例えば「魯陽の文君は將に鄭を攻めんとす。子墨子聞きて之を止め、魯陽の文君に謂いて曰く」（『墨子』魯問篇）と、楚の中原進出の軍事拠点だった魯陽（河南省魯山）なども遷都の候補地となり得たであろう。

(27) 楚王の巫祝王としての性格をめぐる問題については、前掲拙稿「上博楚簡『東大王泊旱』の災異思想」参照。